

わいふ

十周年記念特集③

11月 / 120号

も く じ

【十周年を記念して】

主婦の手	秋葉 薫子	3
十周年記念特集に寄せて	山田よしみ	4
S子さんの場合	小山ヤエ子	6
座談会（九月例会）	後藤美和子	7
編集部がまとめたアンケート特集の概略	〃	12
十年目の疑問	高木由利子	13
十周年記念集会報告	鈴木 芳子	15

【社会の窓】

書くということ	稲垣那智子	19
トイレット・ペーパー騒動	岡部 節子	22
ひとりの女として	土井 邦子	24
和光学園の四季（2）	矢崎 好子	26

【文芸】

ある青春（22）	津堂 健治	29
----------------	-------	----

編集後記	鈴木 芳子	33
例会ご案内		34
会計報告		5

主婦の手

東京都 秋葉 薫子

この夏、「母親が外で働く事について」のアンケートがあったとき、私はいそいそとアンケートを書いた。そのときは、まだ校正という仕事を始めたばかりで、家族も珍しがって、協力的に思えたが、アンケートの締切近くなって、家族の反応も変化して来たので、このまゝでは実際とは違うので、書き直さなくてはと思うつゝ、とうとう締切日に間に合わなかった。

今年の三月に校正者として仕事を始めてから、半年になる。

やっと私も慣れて来て、仕事も少しずつ速くなり、仕事の合間に家事を片付け、家事を片付けつゝ、次の仕事を待つというリズムに慣れて来た。仕事が校了になって、仕事中心になりながら横眼でみていた家事を次々と片付けるとき、充実感が胸一杯に広がる。それは、主婦専業でいた10年間、ついぞ味わった事のない愉しさである。台所仕事、洗濯、つくろい、庭掃除、どれも、今や、私にとっては、大好きな趣味とでもいたいくらいいい愉しさである。趣味などというと、家事は、そんなに軽々しく済ませられるものではないとお叱りを受けそうだが、もちろん、主婦の手で家中が生き生きと清潔になるからこそ、愉しさがあつて、又、そこに重大な意味もあると思っている。

仕事の内容は、書籍の自宅校正なので、いつも子供といっしょにいられる事が何より有難いと思う。下の娘は4才なので、

春ごろ、遊び疲れると、私の所へ来て、椅子に上がり、おんぶだつこと称して、校正をしている私の背中ではらく甘えていく。

寝そべって静かにしていると思うと、うとうとお昼寝が始うとしてゐる。抱きかゝえてベッドに連れていき乍ら、子供の側にいてやれてよかったと、しみじみ思う。

仕事をしてみても痛切に感じる事は、夢中でぶつかつていくとそれだけの手応えがあるという事である。絶対に見落としは、しないと思ひ、確実に知っている事以外は、全て辞書を引く、新米の事ゆゑ、時間ばかりかかつて、あまり経済的ではないが編集部から相応の評価が来る。これが子供だと、いかによい環境を与えて、勉強やピアノをと励ましてみても、親の叱咤激励は果たして、よい結果になるかどうか。育児は、その結果が、あまりにも複雑多様な原因から成るので、単純に親が熱意をもちすぎるのは、飛行中の飛行機に部分的に強い力をかけるのと似てはいないかと思う。その意味で手を抜く事もまた、不安定のもとだと思ふ。私が仕事を始めてから一番、変化したのは、家族に対する感謝と信頼である。「こんなに至れりつくせりにしているのに」から、「……してくれたの、ありがとう」が多くなつたと思う。私の家は、娘が二人なので、娘が大きくなつたとき娘に心配させないでお嫁に出してやれるよう、強い母親になつていたいと、これからも少しずつ校正の仕事を続けていく積りである。男性なら50才くらいはまだまだ立派な仕事さであり、私も40才くらいには、立派な校正マンとして独立する事ができるように頑張りたいと思う。

十周年記念特集に寄せて

吹田市 山田 よしみ

読書することの得手ではない私なのですが、「わいふ」十周年記念特集①そして②は熱心に拝読させて頂きました。アンケートを手にしてから、母親と職業についてあれこれ考えていた為か、共鳴するもの、認識を新にするものなど多々あり、感激いたしました。

アンケート集で、一番興味をもったことは家事に就する回答でした。私は家事が何よりも下手なので、何時も何かいい方法はないかしらと考えているものですから、羨んだり、拍手したりして読みました。回答者77名のうち、一体どの位家事の好きな方がいらっしやるかしら、と考えるながら表を作ってみました。

質問 ABC共通

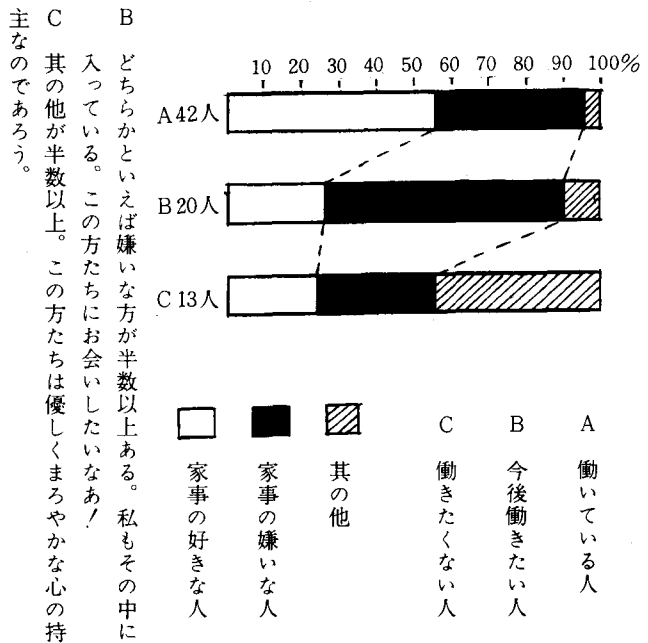
あなたは家事が好きですか。

どちらかといえば嫌いな方ですか。

如何でしょうか？ 表をつくる技術？を全く知りませんので、御助言下されば嬉しく思います。

さて、私はこの表をこんな風に眺めました。

A 家事の好きな方が半数を越えている。仕事を持っている方たちなのに、何と素晴らしいことだろう。



B どちらかといえば嫌いな方が半数以上ある。私もその中に入っている。この方たちにお会いしたいなあ！

C 其の他が半数以上。この方たちは優しくまろやかな心の持主なのであろう。

アンケートの設定の中で、働いた経験者に対して、Aの最後の質問がなかった点、少し淋しく思いました。何故なら、現在働いている方以上に、この質問に答えられるのは、一人三役以上を受持つて働いた歴史をもち、現在、専業の主婦となられた方たちであると、思ったからです。私も、得たもの、失なったものを、しみじみと考えた一人でした。

私の回答を書いてみましょう。

人間	女	妻	母親	主婦	奥さん
得たもの 男性の素晴らしい精神 構造に対する認識	女の地位向上に対する意識	夫への感謝	心を外に向ける意識	夫の役割の一部を果たす意欲	特になし
人間	女	妻	母親	主婦	奥さん
失なったもの 学ぶことの継続	美容と装いの楽しみ	家庭生活設計	育児の技術の修得	素晴らしいわいふたちに接する機会、主婦業の技術の修得	奥さんと呼ばれる幸せ

男性の築いた社会の中で、私は21年呼吸していました。その生活を通じて、私は何と多勢の素晴らしい人間たち（男）に出会ったことでしょう。そして今、専業の主婦となって4年目。ここでは、素晴らしいわいふたちに囲まれています。仕事の世界と仕事を離れた世界とに立ってみて、私は、つくづくと考えます。人それぞれいろいろな生き方はあるけれど、人生とは、男も女も、自分の心の中に、愛を／優しさを／築き上げる道程である……。

働くことは素晴らしいことだと思います。これからは、どんな働く母親がふえてゆくことでしょう。母親が本当の意味で、

外でも内でも働くことが出来る時、もはや、男性オンリーの怪物のような巨大な片腕でさ、えられた社会でなく、男性と女性との均衡のとれた腕のさ、えによって、真に人間の幸せの追求を希う社会の到来を実現し得るのではないのでしょうか。

「わいふ」十周年の記念特集は、いろいろなことを考えさせてくれました。一人で考えていることよりも、多くの方々と考えることが、どんなに意義深いものであるかを、痛感いたしました。

みなさま、ありがとうございました。

会計報告10月1日～11月13日

【前月くりこし】……………11,728円
【収入】……………99,555円

会費 64,980
カンパ 23,595
バザー収益10,980

【支出】……………32,745円

119号印刷代 25,000
" 送料 7,625
集会所使用料 120

【差引残高】……………78,538円

S子さんの場合

池田市 小山ヤエ子

S子さん、満30才。足が長く栗色の髪。頬が引きしまつてさわやかな印象。8年前、彼女達の結婚式の席上で私は言った。

「今、小学一年生の息子が将来S子さんのような恋人をみつけたらどんなにうれしいだろう」と。

S子さん夫婦は足掛け8年の結婚生活で、男の子を二人もつけた。満4才と2才。子ども達を赤ん坊の時より保育所へ預け、勿論共働きを続けた。彼女の職種は保母。

旦那様は、子ども好きで非常によく家事に協力した。

子育ての分担を、男のつき合ひの上に位置づけがなかった。

かなり平等で、新しい夫婦像がそこにあった。

そのS子さんが、この10月、協議蒸発してしまった。

夫と幼い子ども達を残し、貯金も着がえも置いて身一つで、どこかへ行ってしまった。

賭ごと、浮気、暴力、およそ妻の蒸発原因になる要素よりほど遠い夫は、それでも何とか彼女の「こころ」を理解しようとして努力し、結果認め、二人の子どもを引きうけた。

S子さんに新しい恋人ができたわけでは全くない。

理由は「家族を断ち切って、一人で生きなおしてみたい」
何とキザで無責任な。

非難はS子さんに集中した。

夫は妻をかばった。

「女の自立」「仕事への執念」「母性を切り札にされることへの反抗」「子どもを真中にすえた家庭というものの疑い」

こうした謀叛気と未練、自責の板ばさみで、何年か苦しみつづけ、思い直し、やり直し、やっぱり駄目だと爆発したのだ、と夫は仲間に説明した。

「甘えるな。ぶんなぐってやりたい」

「子どもを犠牲にするのは最低がまんするのでなく、何とか方法がなかったのかしらねえ」

S子さんの夫はつけ加えた。

「S子が結婚する前に気づけば、傷はなかった。だが、気づくにおそすぎたというそれだけの理由で、縛ることは出来ないと思つた」

この人は今、仕事、育児、家事とすべてを抱えこんで、毎日を生かすのに必死である。保育所のむかえの時間のため、残業が許されないのが職場でのポストをおりた。

彼女がふたたび戻ることはあるまいと、言い切る彼は、子育てに振りまわされてやつれてはいるが、案外、楽天的で明るいまなざしだ。

いいとか悪いとかを飛びこえて、受話機を通して聞えた彼女のきっぱりした最後の「さよなら」の声と、腕白坊主を両手にぶらさげた彼の柔らかな口元に、異質の強さを感じて、目を瞠ってしまふ。

座談会（九月例会）

——アンケート特集を読んで——

出席者 岡部、斉藤（由）、鈴木、高木、十日市、後藤、

○ アンケート特集を読んで、一番印象に深かった事から、お話しして下さいませんか。それに沿って進めて行きたいと思いますので。

A 全体を通してだったらね、私は低賃金だなーということね。一番高い収入の人でも10万円位でしょう。男の人だったら30代の人で20万近くとれる人もいるでしょう。

B そんなことないわよ。正規の勤務時間だけだったら、40近い男だって10何万円どまりだと思っちゃうよ。

A それでもね、男の人だったら30代も半ばになったら、民間企業の場合、何かの役職につけるでしょう。それに伴っていろんな手当もつくしね。

B 今の日本の男性は、ほとんど時間外労働をしてどうにか家族を養ってんじゃないの、女のように家の事を気にして、きちっと退社してたりしたら、暮らして行けないのと違う？

私が印象深かったと思うことは、家事のこと。外に出るようになったから家事が嫌いになったのか、家事が嫌いだから外に目が向くのか、ということね。殆どの人が家事を負担に思っているしね、比重を重く置いてるしね。確かに私もね、この頃外

に出る機会が多くなつてくると家事がいややね。面白くないわ。元々、そんな要素が私の性格の中にあつたのでしょうけど。

E 実はね、この家事に関しての質問はごくごく個人の限った感情の中から作つた質問だつたと思って、少し反省していたのよ、こんなこと聞いて愚問だつたわ、とね。ところがあけてびっくり、嫌いだ嫌いだという人が多くて驚いちゃった。まあ中にはというより大半の人は謙遜を含めて嫌いとおっしゃってるとは思いますけど。

A 家庭の外に仕事を持つ人間としては、家事の中でも食事作りが一番のしかかって来るわね。掃除、洗濯等は手を抜いたり夫の協力をうけ易いしね。それに料理なんてものは、楽しい雰囲気でもやりたい領分でしょう。事務的にやれる事ではないと思うのよ、食事作りが、何と云つてもウェイト重い感じね。

C 私はね、全体の印象として、自分自身の反省をこめてね、常勤の人で結婚前からずっと続けてやめずに、いろんな努力を重ね乍らやつて来られた人々をね、えらいなあと思う。私もあらゆる障害をのりこえて、ずっとやめずに頑張りたかつたしね。稲垣さんのテーマ原稿など読むと、つくづくそう思う。でも女の人の一人の頑張りじやだめね。夫の後押しもいるしね。私の場合は、続けられなかつた理由の一つに仕事の性格もあるわね。出張を伴う仕事だつたし、子供が二人も出来れば、保育所がたとえあつたとしても一寸続けることは無理だつたと思う。夫からもやめろやめろと云われたし。自分の意志とは関係なしに外の条件で仕事を捨てた事になるわね。女つて無理に結婚することはないのよね——。（席上騒がしくなる）

B でも、結婚っていいよ。

C 若い女の子は、昔も今も結婚を夢みてゐるわね。

A でもね。私たちにしてみたら、若い人が同じあやまちをくり返すかなーと思うわけよね。

B あやまちかねー。(笑) 私は、誰でもやっぱり一辺は結婚した方がいいと思うわ。

A でもね。あやまちと判ったとして、離婚とはすぐいかないからね。

B 結婚すること自体には余り問題はないと思うわ。ただね、子供を生むか生まないかの時にね、慎重になればいいんじゃないの? (ガヤガヤ……………)

D 私が全体を通してうけた印象はね、10何人かの常勤の人を除いた、パートの人、全く働いてない人を見た時、「甘えてるな」という感じ。やっぱり男の人は一家を支えているから真剣だわね。ところが家事を受け持っている主婦はね、さぼろうと思えばさぼれるわけだし、おつとめの方だって、身体が持たないと判断すれば、スーツと家の中にげこめるわけね。結婚して主婦業に就任したのね、家事は嫌いだなんて云ってるのを読んでみるとね、自分も含めてよね、これは一寸「厚かましい」と思ったわけ。こんな感想には反論があると思うけど。でもね、結局は嫌いだと云い乍らも、お手伝いさんを使うこともせずに、こなしているわけでしょう。だからこんなアンケートをとったり、嫌いですと云ったりするのも、一つのお遊びみたいに感じただけよ。

E 私が印象深く感じたことはね、一つには資格を持っている

人がそれを生かし得てないということ。資格の死蔵というのかしら。それともう一つは、「あれっ」と思うような職種がなかったということ。「わいふ」というグループの特色なのか、このアンケートに答えてくれた人のグループの特色なのかは判らないけれど、求人広告でもっとも目だつところの外交ね、保険の外交つて方が1人だけいらつしやつたようだけど、その他にもっとたくさんいらつしやるかと予想してたのが、はずれた感じですよ。生産現場でのパートの方も1人いらつしやつただけでした。それに反して、偶然にも自家営業を含めると、印刷関係の人が3、4人いらつしやつたりで、職種にバラエティがなかったと思う。

D そうね、保育所に子供を預けて働いている母親達の職業と比べたら画一的ね。普通女の人がついている仕事はいろいろあるでしょう。びん洗い、化粧品のセールス、競輪競馬の券売り等ね。そういうのはなかったわね。「わいふ」の場合、一寸ばかりいい格好で手を汚すようなことはしてないわけね。

F そうね、職種をこれ丈に絞つてね、職を探しているとしたら、パートだろうが、常勤だろうが、再就職はむづかしいわね。F 私が全体を通して感じたことはね、皆一生懸命に生活してるんだなーということね。

A Dさんの「甘えてる」とは反対ね。

F そうは云つてもね、自分で独立しているといい切れる人は少ないし、あくまでも家庭というしつかりしたバックを持った上での、という感じは強いけど。

E 全体を通しての印象を聞き終ったところでね、ここに去年

の数字を纏めた「働く婦人の白書」というのが出ていたので一寸紹介してみるとね、現在、女子の勤めに出ている人の数は、

一、一二〇万人で、前年より四万人、〇・四％増えているんだそうです。でもこの伸び率〇・四％というのはね、25年以降最も低いんだそうなのね、雇用者総数中の女子の割合は前年に引き続き低下してるらしいのよ。ところが結婚している女性の雇用率は高まっているらしいね。

A 女性の職場進出率が下ってきたというのは、もう出たい人は出つくしたということなのかしら。

E 私達にもっとも興味のあるパートタイマーの賃金だけどね、この白書によると平均189円（1時間あたり）なのね。この値段は年令とか職種よりも地域間の差が大きいのよ。最高が京阪神の213円、これに対して南九州は129円の安さなの、随分と開きがありますね。パートの賃金は、アンケートの例を見ると、かなり平均より高いものを貰ってる人もいるようだけど、上を見ればきりがなくてね。それにしても昨今のように物価高騰が続けば幾ら稼いでもお手上げね。

A 16年間もあらゆる困難と戦い乍ら働き続けて来た婦人が手取り10万円にならないなんて、ひどいと思わない？

B 働く人達の賃金が安いということね。何度も言うようだけどそれは婦人に限らないと思うわ。男の場合だってね、自由業に近い放送局なんてここでは、仕事柄残業がついてまわるでしょう、だからその手当てを企業側が見込んで、本給の方ははじめから低く押さえてあったりするのよ。勤めている人は搾取されてるって感じね。

A 常勤者でとにかくにも共働きがやれてるのは、先生を含めて公務員が圧倒的ね。

E その点公務員は男女の別なく、どこかが恵まれているのかしら。月給が安いから、恩給までという目標を持っている人も時に聞くけど。

A 結婚した女が、子を持った母が働き続けるための条件には先ず身近かにいる夫の理解でしょう。それに経済的条件も大きいわね。夫の収入丈では暮らして行けないという場合には夫の方の協力も否応なくでしょう。

B それにしても主婦の場合、常勤という人にはつくづく偉いなーと思っちゃうね。

E さすがにね常勤者の人の仕事に対する満足度はツヨイね、個別に当れば中には、あきらめと背中合せの満足をいう人もいるかも知れないけど。それに比べてパートの人はどうもハリが感じられない。自分のくらしを大事にするためにパートを選んでおき乍ら、つまり生活の時間割の理想の型を自分で作っているが、何かしら自信がないというのは、どういふことかしら。

A そうね。自立していると言い切ってる人も常勤者に多いしね。

C 常勤の人たちには自信はあるわね。殆どの人は10年選手だし、ブライドがうかがえるわ。うらやましいわ。パートの人は中途半端の印象がツヨイわね。

E ここで頑張らないと、ここまで来てやめたらパートになりさがる、と書いてらっしゃった人がいましたね、私、シヨックでね。横に線ひいちゃったのよ、まさになりさがるって感じよ

ね、パートになるってことは。

○ この席上にもご自分の努力で個人的にはものすごく明るい展望を持っていらっしゃる人もいますけど、どうでしょうね、このアンケートからみてね、主婦の働くことのこれから先の展望は明るいと思われますか。

C 私はこれから先、パートの層がぐーんと増えるだろうという感じをうけましたね。イライラする人が多くなるわけね。だから見方によっては、展望は悲観的ね。

A 家事労働が今の状態だとしたらそうね。常勤者には頑健な身体と堅固な意志が要求されるわね。家事をやっている時間が、常勤者も家に居る人も殆ど変らない、同じことをやっているわけで、これでは一寸、常勤者をめざす人は増えないわね。

D でもね、育児に手のかかる間は別にしてもよ、子供が中学や高校になった時、やっぱり主婦だけでは暇すぎるんじゃないかしら。日本人の場合そうした時が来て、もう一度社会に踏み出してやろうとか、資格を得て働こうとかいう気構えが少ないんじゃない？

B 気構えはあっても、職場、受け入れる社会がないわよ。

C 受け入れる体制は出来てないわね、昔と違ってないわね。

B 例えば栄養士の募集にしたって、25才までと切っていることが多いわね。

A 若い女の子が折角大学を出ても、すぐさま結婚を夢みるというのも、ごく少数の人を除いては与えられる仕事の内容が、男性の補助ばかりでしょう。面白くないわね。きつと。

E そうなのね、私などがアルバイトでやっている仕事と同じか

それよりもっと分散的な仕事を日長くり返しているわけでしょう。これではね、ウノ目タカノ目で相手を見つけてゴールインしたいわけね。だから週に一度アルバイトに出てくるオバさんつかまえて「うらやましい、早くそんな身分になりたい」とこうるわけ。オバさんとしては「冗談じゃないわ、私もこんな身分になってしまつて今頃になってハツと来て、こんなことではダメだダメだと云い暮らしているのよ、貴女達は是非共、結婚するにしても一生続けられる仕事を道連れにして頑張つて欲しいわね」と云つて返すわけだけ……。

主婦になるのが、女のしあわせの手つとり早い手段という考えが若い人にも根ツヨイね。違うんだだけどね——。

B 私たちはあやまちにしろ何にしろ、一度結婚して経験しているからそういうことが云えるので、やっぱり若い女の子には理解が遠いのじゃないの。

A 女の子の何人かが仕事をもち込んで結婚生活をはじめても乳児幼児を2人3人と抱えた時、むづかしいわね。今の体制ではね。

D 私たちが今持つてくる経験をそのまゝ、持つて20代に返れるといいのにね——。

A 育児の問題だけどね、公的に設備や条件が整った場合に、誰でも子供を預けて働くことをするかしらね。働くことの外でもないわよ、つまり自分がしたいことをね。

F 公的に任せてしまいたい気持と、自分の子供は自分の手で育てたいと思う気持と両方あるわね。自分の腕の中にいつまでもおいておきたい気持って、みんなあるでしょう。

A 日本の場合、3才までは母親の手許で、という説が、伝説的にあるでしょう。あれを先ず誰か打ち破って欲しいわ。どいう根拠があるのかしらね。中国等の保育所のように保母さんと子供の数のバランスが考えてあったらね、必ずしも「母親が」ということは云わなくてもいいことじゃないの？ 集団の中に入れて、それぞれの子供らが個性を伸ばし合う、そんな育児の方が望ましいのとは違うかしら。

D 生んだものが、授乳して育てる、これは基本じゃないの、せめて6ヵ月位は授乳期間としてね。でも本当にその3才までというのは、一寸わかんないわね。どうして？

B 3才頃までに、人格形成の75%位が出来てしまうからということじゃないの、それを過ぎたらね、自分の意志を他人に向って、どうにか通じさせることだって出来るしね。やつぱり子供は少しでも早く集団の中に、入れた方が良くと思うわね。人格形成の時期にこそ、たくさんの子供同志の刺激があってもいいわね。

E 日本の場合、まだまだ子供は個人のもので、社会の子という自覚は零だわね、社会の子ということになってくれば、育児の面はおろか、母性、結婚観、家庭の作り、全て変わってくるでしょうね。

A 育児ということをね、もう少し公的に考えてもいいのじゃないかしらね。親は老後を見てもらわないという風潮は徐々に出来てきているのね、例えば会社よね、20才の男子を雇う時に何万円かを払う丈でね、かなりの貢献を強いるわけでしょう。会社がね、子供を生んでお乳をやって、幼稚園、学校と育ててごらんよ、それは大変よ。そんな大変なことを全部、個人

の負担に押しつけて、使えるようになった者を、安い給料で貢献させる訳でしょう。不合理よ。違う？

F そうね、でもねこのアンケートで見える限り、3才以上の子供であつても「母親が」という意識の強い人が多いわね。個人差がまちまちで、一体育児とは、子供がいくつになるまでを、指すのだろうと考え込んじゃうわね。社会に出るまでは、という考えの人もいたし、大体に於て、子供が大きくなるのを皆さん、待ってるって感じよ。

E ところがね、特に男の子に限るかも判らないけど、中学位になって、母親が急に外に出ることは、かなり問題が起るらしいわね、子供の精神面にね。中学生になるのを待って、外に出る事を決心する母親が多いみたいだけど、これは一つの盲点のように思えるのだけど。

F 母親が外に出るのは、子供が小さい時からの方が良いというのは本当らしいわね。学校の先生に云われた経験があるのだけど、小さい時から生活の中で、母親のいない時間を習慣化して覚えさせておく方がスムーズに行くみたいね。いろんな面で。○ アンケート特集を掘りさげる意味でとか何とか大げさな事云ってこの座談会やってみたのですけど、進行係がどうもこういうことは不調法でうまく行かず、何ともしまらないことになりました。紙面の都合もありまして、後、自立の事についての話し合い等少しやつてはみたのですが、ここに載せる事は、一寸出来そうにありませんので省略いたします。

特集の反応の方、皆さんから、余り来ておりませんが、如何読まれましたか、この座談会の補遺の意味でも、皆さんからのたくさんさんの御意見や感想をお聞かせ下さいませんか。（後藤記）

編集部がまとめたアンケート特集の概略

十周年記念特集の一部として出しましたアンケート特集は、皆さまにも興味深くよんで頂けたものと思います。

会員からの感想や、例会・集会での座談会形式の声も多少集まりましたが、編集部では、一応数字的なものを見ながら、左記のようにその概略をまとめてみました。

① 回答者 77名

20代 4名、30代 46名、40代 22名、不明 5名。

② 収入を得る仕事を持つ者 42名。

常勤者 12名、自家営業者 6名、パート 24名。

③ 職種

公務員、教師（塾・英語・絵・ピアノ等）、印刷業、外交員、パート事務職、保母、洋裁編物等。

④ 今後、適職あれば働きたい者 20名

そのうち、資格、技術を持つ者 9名

⑤ 今後共、働く意志のない者 13名

⑥ 勤続年数及び賃金

④常勤者は殆ど20年近く勤続していて、手取り8万〜10万円（公務員、教師、事務員、その他）

⑦ 自家営業者でも月収10万円位迄。

⑧ パートの場合、時間給200円〜700円。

⑨ 仕事の満足度

常勤者の場合、或る種のあきらめは混じっているものの、概

ね満足。

パート者には仕事の内容、賃金、自分自身のくらし振りすべてにわたって、中途半端な様子がありありと見える。

自家営業者には、満足感とは別に、未来への青写真が描かれている。

⑧ 家事は嫌いだと言言した者 33名。ただし、この数字はやや謙遜の意も含まれていると思う。嫌いだといながら、他の人に代らせている人はいない。

⑨ 自立していると明解に答え得た者 14名。常勤者にこの答を出した人が多かった事は当然で、これは、女性の自立とは経済的独立が密接に関わっていると考えるべきなのか。これに対して、パートで働く者、家庭にいる主婦にとつての自立感、精神的なものを強調している事が目だつていて面白い。

⑩ この特集の全体を通して見た時、常勤者達は、仕事と家庭運営の一切の労働で、二重三重のシワ寄せを受けながらも、その位置を保ち、尚かつ向上せしめんとする並ならぬ決意があり、実力もつきつあると思える。その結果として、自立していると明言できる自信は大きい。それに反して、パートで働いている者及び、今後適職があれば働きたいと思っている者達は、年令的、能力的に、社会の受け入れ態勢の壁は厚く、かてて家庭（夫、子供）との調和が頭から離れず、自分の力量不足の認識と相まって常勤者になろうとする意志弱い。しかしながら今後共、働きたいという者をも含めて、主婦達が家庭という枠内に静居できる社会情勢でない事は皆自覚していることであつて社会に直接参加することを、その早道が就職することですぐさまつながることは疑問にしながらも、志向する時代が来つつあることは明白だと思える。

十年目の疑問

宝塚市 高木由利子

せっかくの十周年誌なのだから「わいふ十年の歩み」なんていう記事がほしいわねと話が編集の時に出て、今からじゃ、どんな方式になるけど、なんとかまとめてみるわと気軽にひきうけたものの、十年分のわいふをどきりと積み上げてみたら、30cm 近くなっていた。

土曜日の夜は、最初の一年目の記事を読むことで終ってしまつた。最近届いた「たいまつ新聞」で、世の推移は「十年一昔」といわれてきたが、今では「一年一昔」だな」と、つい先ごろまでの消費ムードが今や一転して、節約・ケチケチムードに変わった、最近のめまぐるしい情勢の変化を皮肉っていたが、全く十年前の「わいふ」って一体どんな事を書いていたのかなと、ひやかし半分の気持で読んでいたのに、読み進むにしたがつて、だんだんユーウツに沈んだ気持になってくるのをどうすることも出来なかつた。そしてとうとう「ねえ、私らがやってきたこの十年は一体何やったんやろ!」と叫び出さずにはいられなかつた。

私のヒステリックな叫びに、夫はきょとんととして「何のことや?」と呑気そうな顔を向けた。

「わいふの事よ。十年目を記念して、わいふの十年の歩みという記事を書こうと思つて、今一年目を読んでたんよ。そしたら何のことはない、十年経つた今のわいふと全く同じ様なこと

が書いてあるんよ。一つ、物価値上りの事。一つ、公害の事。一つ、老人・老後の事。一つ、経済的自立・共かせぎ是非論。一つ、育児・教育の問題。今も全く同じことの堂々めぐりよ。一体この十年は何だったんだらう。すぐくむなしの気がする」

当時、十日市陸子さんが精力的に連載している「ぬかみそ教室」では、水道料金の問題を取り上げて、原価1㎡7円の水道料が、家庭用のは、地域によって異なるが、1㎡15〜30円位なのに対して、大企業が使う工業用水は、1㎡4円という原価を割った安価であることをあばき、公共料金その他の物価が、政府と大企業によって思うままに決められ、消費者は王様どころか召使いだと怒っている。この体質は今も全然変わっていないどころか買占めや操短による一時的な品薄から意図的に物価の値上がりを企てる現在、ますます悪いやり方となつてきている。

私について言えば第2号でボーヴォワールの「女ざかり」の読後感を書いて最後に彼女の「自活すること。それ自体は目的ではない。しかし人はそれによつてのみ、確乎とした内的自立に達することが出来る。物質的に人の授けを必要としないこと、それは自分が完全な個人であると感じることである。その基盤にたつて私は、精神的寄生と、その危険な安易さを拒否することができた」という言葉を、われわれわいふ族には耳の痛い言葉であると引用し、更に4号で「経済的自立ということ」を書いているのに続いて印南千鶴子さんが6号で「共かせぎ是非論——是の立場」更に9号では「保育所を求めて」を書かれている。「おばあちゃんと孫」（香山俊子）「おばあちゃんへ」（十日市啓志）「思いつくまま」（十日市ミツ）「二十年先の為に」

(小山やエ子)等々、家族関係・老後の問題もかなり書かれているようだ。

十年前の池田内閣が佐藤に変わり、それが又田中に変ったところで、私たち庶民が物価値上がりに相変らず頭を悩ませ、光化学スモッグやPCBなどという十年前には耳にしたこともない新顔の公害が日本列島をおびやかす、トイレットペーパー狂騒曲とでも名づけたくなるようなあのさわぎに象徴される物不足、見方によればこの十年は進歩どころか、ますます悪くなっていると感じた。

私が「あ、むなし、むなし」を連発していたら、夫は「何やそんな事か。人間の行為なんてみんなむなしもんだ」オレなんかもっとむなしいことを毎日／＼繰り返している。お前がよく言っているむのたけじなんかも、戦後から二十何年、一つ事をずっと繰り返しくりかえし言いつづけているやないか。あのおつきさんもむなしいと思う時が、やっぱりあるんちがうか？ 今度いっぺん聞いてきてみ。でも、ま、むなしいという事がわかっただけでも読みかえしてみてよかったな」と、ケロリと言っている。

わいふの無力感は、どこまでもつきまといつて離れないが、ただ、ハイハイと従順に押し流されていったのではないという、ほんのささやかな証拠が、この積み上げた30cmの本の中にあると言えるのではないだろうか。言う必要を感じなくなるまで、くりかえし何度でも、いつまでも言いつづけることが、あるいはやっぱり大切なことなのではないだろうか。

十 十 十

わいふ9号には、はじめて会員名簿が折り込んであった。会員数、計52名。わいふ6・7号で、松田道雄氏の「母親の為人生論」という本を讀書感想文のテーマにして皆から原稿を集めそれを松田氏にも送ってみたら、「暮しの手帖」にわいふの事を紹介して下さった。それがきっかけで飛躍的に会員が増え、一周年記念の時には二百人近い会員数となっていた。その後も新聞や雑誌にわいふが紹介されると、しばらくは問い合わせや、新入会員が増えてにぎやかになるが、でもそれがさめると一人二人と退会者が出て、結局十年目の今も、二百名ちょっとというあまり変らぬ数で安定している。最初の頃は、退会通知のハガキを受取ると、まるで、私の全人格をその人に拒否されたように、その日一日はずい分しよんぱりしていたものだった。

それはとも角、9号の会員52名にかぎって言えば、その中で今尚会員であり続けている人は、調べてみると22名。半数以上の人をやめていったことになる。

半数以上の人がやめていったという事実を置いて考えるべきなのか、あるいは、半数近い人が、あきもせず「わいふ」とつき合っているのだという事実の方がより大切なことなのだろうか。

又、やめていった人に対して考えれば、わいふを見限り、わいふを乗り越えた形で、何らかの主體的な活動に転じていったのだろうか？ それとも、わいふというほんのちっぽけな活動にすら主體的に参加するという姿勢を無くして、世の流れに身をまかせてしまったのだろうか？

さまざまな想念が、ぐるぐる頭の中をまわりはじめた――。

十周年記念集会報告

十月二十八日、わいふ十周年記念集会在、仁川団地で開かれました。色々と行事の多い十月、又、生憎の前夜からの雨のせいか、出席者十一名というちよつと淋しい集まりでしたが、会の方は、初めてのお顔も見られ、なごやかに進行了ました。

それ／＼のお話を聞いていると、つい手の方は留守になってしまい、とうとう何も書かないうちに会の方が終ってしまいました。時間があまり無く、近況を話し合う程度になりましたが、直に顔を見ながら話し合うことは手筈があり、お互いに親しさが増して感じられました。報告といえる様なものではありませんが、お菓子でも食べながら、当日の雰囲気を想像して読み下さい。

石川美智子さん（大阪）——昨年の記念集会で会いした折は、下請としてなさっていた仕事を、独立して今度は人を使ってやる様になったと聞いておりましたが、あれからの一年、ビジネスオンリーのきびしい生活をなさっていたそうです。その結果、立派な地盤も出き、これからは、少し仕事の方はセーブして、顔にやさしさのある生活をしたいの事でした。男の人が新しく仕事を始める時は、回りからの引立や守立てがあるのですが、女の人が独立して仕事を始めるとなると、足を引っばるものも多く、実力を見込まれて間屋さんの引きで独立されたようですが、この一年は実績をつくる為、ずい分根をつめて仕事に打ち

こまれた様です。ご主人をはじめ、二人のお子さんの大きな協力のもとに一つの難関を越えられ、ホツとした感じと、少しお疲れのせいか、経済的な点がなければ、仕事をなげ出したいという言葉も聞かれましたが、その言葉の後からも並々ならぬファイトある話や、男性の二倍も三倍もの収入とお聞きしては、一同思わずタメイキをつきました。

アンケートにはお忙しくて残念乍ら参加して頂けませんでしたが、もし参加して頂いておれば、女性の株も、もう少し上っていた事でしよう。

仕事を受ける立場から、仕事を出す方の立場にかわれ、そこからパートとか内職をする人を見た場合、先の事を考えずに目先の値段だけですぐ仕事を変える人が多いということが指摘されていました。パートや内職につきまとう甘えは、私自身もその立場にありますので、耳の痛い話でした。

平田恵美子さん（神戸）——高木さんのお姉さん。来年のお正月で満二才になるお子さんがおられるとのこと、それじや、目下育児に手一杯の時と思っていましたら、どうして／＼。お忙しい中を色々とお活躍です。『子供のしあわせ』の読書会、新婦人の会の世話、日本画、人形作りのおけいこ、そして十年來の学習塾と、やわらかな口調で事もなげにおっしゃるのに、びっくりしてしまいました。同行のお母さま（森さん）が高年出産でと心配なさっていましたが、忙しい時の方が却って家事など能率的にかたづけられるとの事です。

折から神戸は市長選の投票日、今度の選挙には田中首相が四

度も大臣を引連れて来阪、ビラ攻撃もこの紙不足の折にもか、
わらず、ずい分すごかったそうです。ない／＼と言ってもある
ところにはどっきりあるのが日本の品不足のありさま。ちり紙、
トイレットペーパーの値上り、本代の値上りと我々のサイフへ
は確実に紙不足がくいこんで来ていますのに……。

大村輝子さん（池田市）——「年に一度の親孝行」と毎年秋に、
ご両親のお家へ稲刈りのお手伝いにいらしてゐるそうで、集会の
日が丁度その予定日だったそうですが、前夜の雨で急遽バザ
ーへの出品物として、ケーキをたくさん焼いて出席して下さい
ました。

大村さんは特集②に「職業を持つ母親と共に」という題で、
共働きの方の子どもを預ったご経験を投稿して下さいいま
す。アンケートや、テーマ原稿を読んで色んな方の生活が、ド
ラマよりおもしろく、わいふの会員は「骨があるなあ」と感
じたそうです。テーマが「母親が外で働くことについて」だっ
たので、実際に働いている人の方が書き易かった為かも知れ
ませんが、Aが多いのに、ウーンとうなり、家事のきらいな人
が、これ又意外と多いのに安心すると共に、男性がみたらどう
思ふかしらとちよっぴり心配との事。大村さんが昨年の集會に
ご出席なさった時は、赤ちゃんがまだお腹の中でしたが、もう
その赤ちゃんが八カ月だそうで、さぞかわいい盛りでしょう。
そのお子さんをご主人に預けてのご出席でした。ご主人さま、
ご協力ありがとうございました。

森かなえさん（神戸）——いつもお元気な森さん、もう70才を越
していらつしやるそうですが、少しもお変りなく、今も小さい
お子さんの世話や、老人大学へのご出席、奉仕活動等、色々とお
忙しそうです。おまんじゅうをたくさん持って来て下さいまし
ました。市長選の話、赤い羽根の募金方法、信仰なさっている
宗教の話など、話題も豊富で何よりもお元気なご様子が、老い
を明るいものに感じさせられました。暫く誌上でお目にか、つ
ていませんが、又、お書き下さい。

土屋比佐子さん（宝塚市）——少し前に尼崎から宝塚の中山の方
へ引越され、地元になったので、初めてご出席下さいました。
下のお子さんが二才の時（現在は二年生）からラボ・テュータ
ーとして自宅で英語を教えていらしたそうですが、今度のお引
越でこの方は目下休業中。現在は週に一度、以前の尼崎の方へ
出張教授に行っておられます。アンケート特集にA-33の方が
同じラボ・テューターの立場から問題点を書いておられました
が、土屋さんも同じ様な悩みや問題を話しておられました。時
間の関係でラボの内容についてくわしくお聞きすることが出来
ませんでした。規模が大きくなるにつれ、当初めざしていた
方針との間にズレが生じたり、又、ラボに行かせる母親の態度
も、だん／＼と変って来て、小学校も高学年になると塾の方へ
横すべりして行く子供が多くなったそうです。ラボ自身の組織
の中や、子供達の側にも色々問題があり、今の場所でのラボ・
パーティー開催については迷っているとの事でした。週一度の現
在のパーティ的な仕事についてる自分に甘さを感じ、ひけ目を感じ

じるが、あせらず、自分のペースで進んでいきたい」と、将来の中学か高校の時間講師をめざし目下その方の講義にも出ておられます。

土屋さんは以前「言葉のおもしろさ」という題で投稿して下さいましたが、ご経験されたラボの事や、そこから見た子供達のこと等又投稿して下さい。

食べる方も忙しく、時間がすぐたつてしまい他の出席者の方にはお話を伺う事が出来ませんでした。どなたも誌上でおなじみの方ばかりなので、又の機会にさせて頂きました。他の出席者、岡部節子さん、小山やえ子さん、斉藤由美子さん、高木由利子さん、後藤美和子さん、そして私。

小山さんからアンケート特集を読んだ感想として、常勤の人達が自信を持って自立していると書いておられたのが印象的で、それに反し、他のパートや仕事を持っていない人達は、自立という事を精神的なものを重視してとらえ、自分を納得させている様に感じたという話が出ました。これらの事については、別に小山さんより原稿を頂きましたので、ここでは省略させて頂きます。どうぞそちらの方をお読み下さい。

最後に石川さんから「やっぱり女の幸福は家庭の中にある様に思う」との発言があり、斉藤さんから、「自分の立場」で自立の意味がかわってくると思うが、家庭でのことが女のしあわせ、女の道というのは、今までの社会が、女性に押しつけて来たものではないか」と反論が出ました。現在バリ／＼と仕事

をしている石川さんからのこの言葉に、私も意外という感じを受けましたが、これから又一年、来年の記念集会にはどの様な石川さんにお会い出来るか楽しみです。

次回からのテーマについては、次の様な意見が出ました。

(1) 今回は収入を伴った働く母親の生活を取り上げたので、次は収入を伴わない「地域活動」などを取り上げてはどうだろうか。

(2) 「地域活動」と限定せず、もう少し範囲を広げて（趣味なども）「自分のささえとなっているもの」についてでは。

(3) 「新聞記事から」という様な題で、どんな記事でもいいのですが、「この記事の書き方はおかしいなあ」と感じたり、ちがう新聞での同一記事の読みくらべなど、新聞の記事に対する疑問等を寄せ合い、マスコミに対する批判の目をやしなうてはどうか。

(4) 「この日本的なもの」という様な少し漠然としているが、受取る人のそれ／＼の角度から取り組めるテーマにして、多くの声を集めれば、何らかの結論を引出せるのではないだろうか。このテーマの件については、最近のわいふは少しむづかしいので、原点に戻って、何でも書ける様なわいふ、笑いのある文章もつけてほしいという希望がありました。わいふに何を求めるか、それぞれの立場でテーマに対する考えもかわってきますが、現在のわいふは、テーマ一本にしる様な編集をしておりませんし、テーマ以外の原稿も大いに歓迎していますので自由に投稿して下さいれば、うれしく思います。

テーマを決める事は、一つの事柄に対する多くの人の意見が

わかり問題を掘り下げる事が出来ると共に、又、それを通してそれぞれの生き方考えなどがわかる利点があります。この場では結論を出すまでには至りませんでした。追って例会や編集会議で決めお知らせ致しますので、その折は、ふるってお書き下さい。

— + — + —

予定していた時間がアツという間にすぎ、しゃべりたりない感じもありましたが、それぞれご主人やお子さんを置いてのご出席で、暗くなるのも早いこととて、二時半からバザーに移りなごやかなうちに散会となりました。

今年のバザーは近くの者の持寄り品だけなので、品数が少なく淋しい感じがしましたが、例年の様な売れ残りがほとんどなく、それ〴〵の手許へ引取られて行き、ホッと安堵しました。

——ご出席の皆さん、ありがとうございました——

追記

平田さんと大村さん、お互いにどこかで会った様な気がする、出身地や、住所あわせがいろ／＼ありました、なか／＼出合いの場所がわからず、回りの者もはら／＼しましたが、やつとの事で、大学の同窓生だったことがわかり、一同胸のつかえがおりました。学生時代はお互い全然おつきあいが無かったそうですが、集会出席が思わぬご対面となりました。来年の記念集会は、さて何がとび出すでしょう。

◆バザーに出品してくださった方（敬称略）

石川美智子、大村輝子、岡部節子、小山やえ子、河本浩子、鈴木芳子、松浦照子、高橋紀子、高木由利子、土屋比佐子、後藤美和子、平田恵美子、森かなえ

（河本さん、松浦さん、高橋さんは、ご都合で会には出席頂けませんでした、品物を届けて下さいました。）

●カンパしてくださった方（敬称略）

荒木李恵子、山田昌子、亀山利子、笠原嵯枝子、石川美智子、印南千鶴子、川中重雄、斎藤由美子、下条和子、十日市睦子、藤本巳代子、松浦昭子、森かなえ、森きぬえ、大村輝子、行俊敏子、浅間まさ子、河崎恵子、高橋紀子、村上徹子、森弘子、後藤美和子、藤浦だい、森田季子、山田好美、渡辺富子、足立敏子、

皆さんご協力ありがとうございました。（十一月十日現在）（鈴木記）

バザー収益金	10,980円
カンパ	23,595円
合 計	34,575円

「書く」ということ

神戸市 稲垣那智子

「わいふ」が届けられると、いつも心はずませて封を切るが一二七号が届いた時は、心が重たかった。

編集部の方から母親が外で働くことについて書いてみませんかとおそそいを受けて、子どもが中学生になったということ一つ一つの節をむかえ、感じることがあったし、書いてみませんかという誘いを受けたことによつて勇氣を得て、あのことと、あのことの二つのことを書く。二回に分けないと書けないなど内容と構成はきまつた。一一六号（その一）は日頃おもっていることを書き綴つた。だからすらくと書けた。七月の中ごろに一一六号を受けとつた。一一六号を受けとるまでに、学期末をむかえる頃になると、（その二）が書けなくなりそうなので準備をしないといけないとおもいながら一日のばしになつていった。

一一六号を受けとつてから二十日までには仕事の上で一番忙しい時、学期末の仕事がひかえている。それに連日水泳指導で、私も水につかるので、疲れて夜は睡魔とのたたかい。若い頃は二晩ぐらいの徹夜は平氣だったのに、年を重ねると、こんなにスタミナがなくなるものか。一番たいせつな通知表だけはまづ仕上がないといけない。備考欄を緊張して心をこめて書く。

それから「わいふ」の原稿を考える。どうして（その二）は

自分のいいたいことをふくらませることができないのか。それは、資料が乏しかったし、まとめていなかったからだ。書けないのを書くとするから悪戦苦闘。はては、ああ、つづくなんて書かなければよかった。「つづく」って書いたばかりに、後始末をしないといけない。通院休暇のところや、はつきりしないところは、あけておいて、投稿する日の朝学校に行つて事務の人から法規の本を借りて調べて字をうめて、書きたりない気持ち、後めたい気持ちをいっぱいこめてポストの中に入れた。

かくてあの文になつたので、まったく心重たくページを開いた。すると、トップに私の名前がでている。顔がすつと赤くなつていくのが感じられた。でも書きおえた時のさわやかな気持ちは忘れがたい。どんな拙い文でも、一つの仕事を完了したという充実感を味わう。それでまた私は次の原稿を起こそうと、しようこりもなく紙に何か書きつける。

おもつたこと、感じたことを、そのまま書いてごらんなさいと子どもたちにも、よくいうが、さあ「書く」となるとどうしてもかまえてしまう。いろいろな抵抗がある。その抵抗は子どもとおとなとはつきりちがう。子どもは、何をどのように表現してよいのかわからない。

四十人ひとりひとりの子どもと毎日心の通つた話し合いをしたいと願つて続けていること、それは「先生とノートで話しをしましょう」ということで、一さつのノートに連絡メモとか学習計画とか子どもが書く、その余白に「一すじでいいからその

日に感じたこと、思ったこと、先生にいいたいことを書きなさい」といって、翌日私の机の上にふせて提出させる。さいしょは子どもも何をするののように書けばよいのかよく分からないので「きょうの体育はおもしろかった」とか「○○さんがこんなことをいいました」とかの程度の文しか書かない。しかしそれでもかまわない。ノートを提出した全員に必ず毎日へんじを書きつづける。そしてどんな感じ方、見方、書きあらわし方をしたらよいのか、ノートのへんじを通して、また全体を通じて指導していく。一カ所でもキラツとかがやく文を書いた子、この子がこんなすばらしい文を書いたという時は、自分だけの胸にしまっておくのもつたなくて、またうれしさのあまりその子の承諾を得て全員の前で読む。そして他の子も何かを得られる。しかし決してあせらない。そのうち一カ月もたつと子どもは必ず心の中全部をひらいてくれる。子どもは感受性が強いから、世の中の一つのできごとからおとなでは感じないことまで感じとり、見方、考え方が豊かになってくる。

そのノートが、私と子どもをむすぶものとしてなくてはならないものとなってくる。ノートから一人一人の子どもの悩み、疑問、学習のつまづき、喜び、おもいを知り、私の指導すべきところを、子どもから教えられていく。毎朝山と積まれたノートを前にして、きょうはこの一さつ一さつのノートに何が書いてあるのか、期待に胸がふくらむ。

「先生、あのね……」と話しかねば書かれている子どもの文からは、かまへや気負いや銜^はいは感じられない。あるのは、開かれた子どもの心からのさけびや思いである。だから長続き

をするのだろう。子どもも私もあきもせず続くのであろうか。このノート「^{はく}わたくしのくらし」というのは、八年間ぐらいつづけている。卒業する子が、「稲垣先生から『くらし』のノートをとってしまつたら、先生のいいところなしだからせひこれからも続けてください。」などと逆に励まされたり。

おとなは「書く」ということをどう感じているだろうか。

授業参観のあとの学級懇談会にでる話し合いは、いつも同じような内容の話し合いになるので、どうかして懇談会を実のあるものになりたい。それにはふだんから保護者の声を少しでも集めてためておこう。また、保護者の共通の話題、話し合いの場を提供しようとして、学級を七つのグループに分け、七さつのノート「つぶやき」を回覧している。名まえのとおり、「ふだんから気のついていること、つぶやいたことをノートに書いてください。そしたら、みんなも自分と同じ悩みを持っているね。あのような考え方もあるのだな。ということがわかります。」という趣旨ではじめた。「つぶやき」の中には、長文あり、一行の文もある。なるほど長文には訴えるもの大いにあり、しかし一行に書かれた文の中に、キラツとかがやく親のねがいを痛いほど感じる時の方が多い。だからそんな時また私はうれしくなつて赤のアンダーラインを引いてしまふ。

しかしこんな文もあった。

「みなさんが、りっぱな文をりっぱな文字で書かれるので、私にとって『つぶやき』に文を書くのが苦痛です。みなさんのように書けませんから、順番がまわってきても『つぶやき』に

書くことをやめさせてください。」

わたしが（その二）を書くのに悪戦苦闘をしている時に日君のおかあさんのこのことはがちらつと心をかすめたが、この文を読んだ時、あとでこのおかあさんには、「書けない時は、むりして書かないで、ノートを読んでみてください。そしたら、こんな考え方もあるのか、あ、私と一しょのこと考えている人もいる、とかこんなことでも書けばよいのだなとかいろいろなことがわかりますよ。こんな時読むだけにしておいて、また買い物のとちゅうなどでふうと感じたこと、そこへんの紙きれにメモしておいてまた書いてくださいね。子どもさんも「くらし」のノートでがんばっていらつしやるのですよ。だからやめさせてくださいなんていわないでくださいね。」とおねがいました。

とかなんとか自分で「書く」ということに重要性を認めながら、やっぱり「書く」ということは、文字が残るし、構えるし苦しいし、しんどい。でも「わいふ」が届けられると、書いてみようという気になる。茶わんを洗いながらふつと「あのことを書くこう」と思う。しかし、まだしゃばん玉のようにその思いも消えてしまう。

それで、もっぱら読み手にまわっている自分であるが、「わいふ」を一けたの号から読んでいたわたしにとって、「わいふ」は、どんな性格を持った誌であったらよいか、常に私の心にひっかかっている。包装紙のはしにでも書きつづったつぶやきの文が全員掲載されるのが魅力の「わいふ」でよいのか。

そんなつぶやきではあきたらない、テーマをきめたり、問題

提起とか、ひびき合いの場をつくるべきの「わいふ」でなければならぬのか、私にもわからない。

しかし私は、八月の夏休みになったら毎年毎年あきもせず、古い？、なつかしい手ずりの「わいふ」をとりだして読み返してみよう。手ずりの「わいふ」は、表紙を手でそつとなぜまわしたい気もち、なつかしい。印刷の体さになった「わいふ」は何となくスマート、すっきり、保存にも便利。

一一七号の「わいふ」を受け取って、矢崎さんの「和光学園の四季（一）」を読んでから、矢崎さんの「PTA改革の戦略・戦術」をまた再び読んでみたくなった。ことしの夏休みは、八十七号の「わいふ」からひっぱり出してきて、続けて一気に読みなおしてみた。「ぬかみそ教室」に掲載されていたその頃は自分が先生という立場から読んでいた。しかし、一一七号を読んだから、矢崎さんは、私にとって、PTAをどう考えたらよいか、問題を提示して下さった。また矢崎さんの文を読んでみようという気持ちをおこさせて下さった。一一八号の続編が待たれる。矢崎さんは幸いに全P研の運営委員をやっていたらつしやるし、「PTA研究」という雑誌の編集をしていらつしやる。矢崎さんからもつと／＼PTAや教育に関する考えを「わいふ」を通してみんなに知らせてほしい。問題を提起してほしい。

また、照井さんでどんなお方だろうとおもう。照井さんの文も私なりにいろ／＼教育について考えさせられ、印象に残る。お会いしておはなしたい気になる。

「わいふ」は私にとって、このような存在である。

また今月も原稿を書くのがしめ切りまぎわ、きようは八月二十三日である。書くひまは十分ある夏休みなのに、高校野球に熱中し、書くのが遅くなり、カレンダーをみながら、えんぴつで書いた字を消したり原稿を切ったり、はりあわせたりしながら、また、しょうくりもなく悪戦苦闘で書いている。「この原稿しめ切りはまだ間に合うかな」。横で主人がお昼ごはんまだかと待っている。

昼食がすんだら、鈴蘭台の郵便局まで行って、速達で投函してこよう。

(掲載がたいへん遅くなりすみません 編集部)

トイレット・ペーパー騒動

宝塚市 岡 部 節 子

10月の終り頃から関西地方を突然襲ったトイレット・ペーパー旋風は、ひとまず小休止状態といったところです。この事件については、毎日の新聞紙上にをぎわし、アレコレと結論づけをされました。要は無知な消費者がまき起こした事件だ、品不足で値上がりするという業者の口車に乗ってしまい、買いだめしようという主婦のあせりが、あんな事態を呼んだのだということのようです。たしかに結果としてそれが最大の原因でしょう。でも……

紙不足は春頃からきざしがみえていました。子供のノートは30円だったのが四月に40円、そして九月に60円となったし、私が勤めている百合写植でも用紙の値上がりや、ものによつては

問屋にもない時があつて人知れず苦労している高木さんの姿をみていると、紙不足というものが実感としてわいてきておりました。こんなに急に無くなるなんて、公害さわぎに対抗して業者が消費者に仕返しをしているのかもね、でも毎日の新聞折込み広告や選挙の時のバカみたいなビラ合戦をみるとまか不思議と話し合ったこともしばしばでした。

私の住んでいる地域のトイレット紙さわぎのあとを振りかえってみると、10月22日頃、近くの生協で通常価格より40円も安い売り出しがあつたので三包購入。(このストックのおかげで今回の騒動にまき込まれなかったが、夫に言わせると、この買いおきが原因の何分の一かになっているような。)その時は棚にまだ山積みされ、買う人もチラホラの状態。

10月28日、あとで人から聞いた話では、大きな箱ごと買う人があつたりして、そろそろ一人何包宛とかの制限が加えられ始めたそうです。それでもまだ別にどうってことはなかったのが、このあと連日の新聞記事に煽られて皆がさわぎ出し、次から次へと連鎖反応を呼んでしまったのでしょう。ほんのわずかに、三日の間にアレヨと言わんばかりの大事事件に仕立ててしまったのは、マスコミに大きな責任があるし、またその力の恐ろしさをつくづく身にしみて感じました。

この間の新聞(朝日と毎日)のタイトルのなかから抜き書きしてみると、私達消費者の神経を何かの方向へかりたてずにはいられないものが見られます。

10月30日 トイレットペーパーお前もか・しのびよる不安と焦燥・一個限りに渋い顔・紙不足ここまで・ウーン……この長い列・トイレット紙を買うのも行列で・ついに非常事態発生・紙

不足に整理券の発行

11月1日 紙の狂騒曲・奪い合い……開店30分で売り切れ

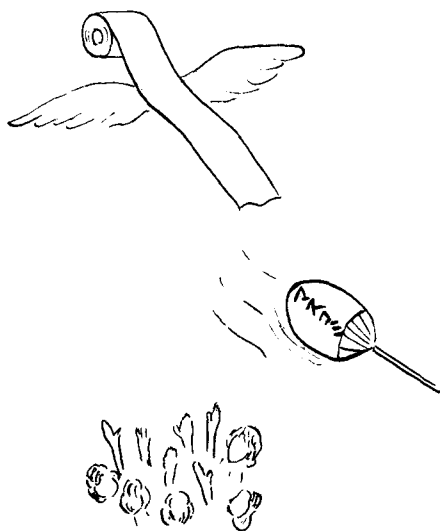
11月2日 トイレ紙不足って本当なの？調べたら生産増・うわさに踊る現象・千里タウンではすっかり消えたけど：

11月3日 緊急輸送開始・買いだめやめて・価格凍結令も発動・行列買いで主婦骨折 等々……ピークに達した感がありました。こんな調子で朝夕書きたてられてから、あちこちで、ソレツとばかり主婦が買いに走ったのです。新聞をみた主婦達が一団となってベビーカーに赤ちゃんならぬトイレ紙を山積みして家路を急ぐ必死な顔付きに、国鉄・私鉄・電気・ガス・郵便と相次ぐ公共料金の値上げ、米価・灯油・食品・学用品……と家計への圧迫にこらえ切れなくなった不安があふれていました。また40代50代の主婦の目付きのせつばつまった真剣さには、戦時中の物資不足のにがい思い出が再現されているようで、圧倒されると共に、値上げにおびえる主婦の自衛手段であるとかから同感できました。それを新聞やTVがトイレ紙のみに焦点をあわせて煽りたてた揚句、主婦達があさはかだったから：はないういものです。どうしてもと根本の原因を追及し、世論を盛り上げないのか、ひそかにほくそ笑んでいるのは誰なのかを明らかにしなかったのか、怒りと不満が残ります。

11月5日 お待たせトイレ紙・行列すぐ解消・のこり山なす新聞では事件は落着いたことになっていますが、値段は上がったまま、今日10日もまだ店舗の紙置き棚はカラッポです。開店前から行列が延々と続いて、その日の入荷分はまたたく間に消えてしまうそうです。私のように夕方の買物客には、まだ当

分手に入りそうもありません。今まで食事の時に子供が汚くすると、すぐティッシュペーパーに手が出ましたが、今は節約せつやくとふきんを使い、紙を大切にねと口ぐせのように言っているのです。子供も少しは自覚してきたのが、思わぬ拾いものではないか。

そうそう今度は洗剤の買いしめが始まり、「石ケンお一人様一個限り」のピラがむなしく垂れ下っておりました。洗剤に、砂糖に、その次は……。今日のニュースではトイレ紙さわざはとうとう名古屋と関東にも飛火したとか。やっぱりマスコミさんのおっしゃる通りに、消費者は、イヤ主婦は無知で無秩序なのでしょいか。国民のこの思いが選挙の開票結果となかなか一致しないのが奇妙であり、また落し穴なんでしょうね。



ひとりの女として

大阪府 土井 邦子

「サンダカン八番娼館」を、胸のつぶれる様な思いをしながら、読み終えて、真先に思ったのは、女って悲しいものということでした。

というのも、少し前に、石川達三氏の幼年時代を書いた「私ひとりの私」を読んでいたから、よけい、そう思ったのかも知れません。

作者の母が十八才から九人の子供を産んで、三十六才という若さで、亡くなっているのですが、神の授かり者だからと、家庭状況や健康を省みることなく、年子、年子と出産したのです。貧乏ゆえに、里子に出したり、引き取ったりで、亡くなる迄、苦しみ抜きました。「母は出来ることなら、その胎を閉ざして産むのをやめたかったに違いない」

作者はこの様に表現していますが、子供ながらに、次々妹たちの産まれるのを冷ややかに見ていたのです。この本は勿論、他に共感覚えるところはあるのですが、同じ女性として、このお母さんが、かわいそうでなりませんでした。

私は六人きょうだいの四番目ですが、昭和十八年といえど、母もちょうど今の私の年で、あれ程の貧困の中で、やはり、産まずに済むなら産みたくなかったらうと思うのです。母に聞いたことはありませんが、今なら計画出産できるものを昔の女性

（裕福な妻はそうではなかったでしょうが）は、そんな苦しみも持っていたのです。私の母は、決してモダンな人でなく、いつまでも田舎もののお人良しですが、必ずしも、多勢の孫は、望んでいない様です。私が末っ子を妊娠した時、健康状態を心配して、あまり賛成ではなかったのです。でも私が、産んでしまつて、「もう子供は三人で良い」と言つてから、真剣に避妊の心配をしてくれました。つまり、こんな進んだ時代に出産の為に身体をこわしたりするのは馬鹿げているという事と、女性が生子を産み育てることだけで、人生を送るのは、昔の自分達とちつとも変りがないということです。そんなことから、私は石川達三氏のお母さんも、私の母も同じ様な苦しみを味わい、しかも、誰にも、夫にも理解されず、苦勞したのだなあと思うのです。勿論、子供は成長してみれば多い程良いという人もいますが、それも結果論で、五十才も近くなつて、子供から解放されても、身体がきかなくなつていたとしたら何にもなりません。母は自分自身の楽しみを持つゆとりもなく、あけくれて来た為、私達には、そうならない様、よく諭します。最近の母は他人の世話をすることで忙しいのですが、私には女という鎖をとき放たれていきいきとした人間に見えます。昔、道楽をして、母を苦しめた父は恍惚とまではいきませんが、毒氣が抜けた人の様に母に寄り掛かつて生きています。

つい最近会つた時、母に「お母さんも、仲々波らんに富んだ人生を送ってきたから、本でも書いたらどう？、お父さんの悪口も思う存分書いて……」といったら、父は黙っていました、

冗談でなく、母から、くわしい話を聞きたいと、私は思っているのです。

さて、「サンタカン八番娼館」は前々から、読みたいと思いつつも、気ままに新刊書を買えるゆとりもなく、移動文庫に入るのを待ったりして、のびのびになり、最近、やっと購入できました。

いろいろ思うことはありましたが、やっぱり、どうにも我慢ならないのが、どうしていつの時代も、女が男のなぐさみものになるのかという事です。

日本の社会的条件から、犠牲になったからゆきさんが、第一次大戦に勝利をおさめ、廃娼令が公布されても、その後の身のおき方は、何一つ心配されていず、単に帰国船にのせられただけだったのです。老齢のからゆきさんが困り果て、自殺したりおサキさんの様に生きている上の最低の生活さえ、保証されずに放っておいたという事に、怒りをおぼえます。もう一つ、他の多勢の外国人相手をした中で、日本人の客が、一番思いやりがなく、乱暴な扱いをしたという事も、悲しい話です。からゆきさんにしてみれば、内地恋しさに、日本人をなつかしむ気持ちがあったと思うのです。日本の男性のいやな面が今日でも海外の不人気も同じ欠点として、おサキさんが指摘している様にさへ受け取れました。

からゆきさんとは違いますが、明治の末、やはり、貧しい村で、白いごはんが食べられるなら、村に居るよりも、吉原へ売

られていった人達がいます。沼津の我入道という漁村で、もつと貧しい村から、漁師にする為、男の子を買って、その代金を作る為、娘を売るのはです。（芹沢光治良の「人間の運命」で今読んでいる途中です。）どんないやな事とわかっていても、残される家族に、白いごはんとは、自分も毎日のひもじさから、解放されるならと、むしろ、すすんで行った人もいます。やがて、吉原から、救ってくれる人が居て、村へもどつてくると、自分を売った代金が、一家の貧しさを救っていると期待していたのに、相変らずの貧乏ぐらしで、自分のねる場所もない有様に、吉原にいた方が良かった、何のために恐い思いをして逃げ出したか、わからないとなげくのです。

私はやっぱり、女って悲しいものだと思っていました。そして、これは明治の話じゃなく、現代でも形は変わっていても、女性が男性のなぐさみものになっている事があるし、どうしたら、この様な事がなくなるのかと思います。

矢崎さんの「母性迷信」を読んだ頃から、私は女性の生き方というものをいろいろ考える様になりました。女だから、妻だからと、あきらめるのでは、母の時代から、少しも進んでいないことに気がついたからです。

和光学園の四季(2)

東京都 矢崎 好子

私が公教育の現状に絶望し、しかもわが子を私立へやることは、教育運動をする身として敵前逃亡にならないか……と、和光学園の前に立つてとつおい迷ったあの春の日から、すでに一年半がすぎ、麻子が和光学園に入学してから十カ月を経た。

一年半と十カ月、その差の間だけ、私は迷いに迷ったことになる。和光の授業を参観し、和光の内容を知る人に話をききまわり、校長丸木政臣氏の著書を読み……しかし私に決心をつけさせたのは、それらの情報よりは、主人の勤務する会社の杜宅が、和光のすぐ近くに建つという、ウマイ話だった。すでに杜宅に入っているのです、はたしてそこへの移転を認めてもらえるかどうかは分らなかったが、主人には強力に申し入れてくれるように頼み、「孟母三遷だね。」と笑われながら、丸木氏に会ってお願ひするという、「最後の詰め」をしたのだった。

麻子は入学してからも、杜宅ができるまでの八カ月、電車に乗って通学した。新宿という盛り場を通って、男の子にからかわれかねないほど、体だけは大きくなった女の子が通学するのだから、ずいぶん心配であった。それに、和光は、子どもを四時五時、行事の準備のときには六時ごろまでも残しておくので、新宿まで迎えに出たことも何度もあった。そのためだろうか、学校の廊下に赤電話があるのである……。

つまり、私は和光の教育がよくわかって娘を入れたというよ

りも、物理的な条件がよくなったので入れたのである。しかしそれから十カ月、目のあたりにした和光の教育は、私に對して、教育はいかにあるべきかということをかまざまに考えさせる、大きな問題提起をしてくれた。私は公立の教育に對して、否定的にならざるを得なかったが、ではどういう教育がよいのか、具体的なイメージを持つことはできなかった。和光はそれを示唆してくれたのだ。

和光の秋の運動会は、十月七日の予定だったが、雨に降られて十日に延びた。

今日はその運動会、東京の空もさわやかな青に晴れわたって、ほんとうに体育の日らしい朝である。私は主人と下の子をつれて、もう始まっている、麻子が怒っているよなどいいながら、和光学園へ急いだ。着いてみると案の定、開会式はすんでしまつて、プログラムにある「演技」2番の、60mハードルがはじまつていた。走っているのは五・六年生で、まもなく麻子が走り出し、長い長い足で三つのハードルを飛び越すというよりはまたぎ越して、一等になった。運動会ではビリよりとつたことのない私は、羨ましいのと、自分にこんな子ができたのがおかしいのと、げらげら笑うばかりであった。

しかし喜んでばかりもいられないのは、この運動会は父母参加なので、私も出場しなければならぬ。たいいていの父母が出場させられ、すでに出場種目もきめられてあった。得点は団体ごと（赤と白の二組）なので、父母の得点も勘定に入る。運動不得手の私に、娘はまずいことをしないでくれと予め文句をつけていた。もしビリになったら恨まれそうだと心配であったが、

今日、子どもたちの競技を見ているうちに、私にこの団体得点ということの、教育的意味が分ってきた。

大阪にいたとき、PTAで運動会の賞品を買おうという議が起ったことがあった。私は思わず、「私は小学校に入ってから女学校を出るまで、ビリ以外になったことがなく、一度も賞品をもらったことがなかった。鉛筆一本だからいい、ノート一冊だからいいというものではないので、ほんとに羨ましく、辛かった。こういう子どももいることをお忘れなく。」といった。けっきょく買わないことになったと記憶しているが、その私にも、なぜ能力あるものがほめられ、賞品をもらってわるいのか、その理由ははっきりしなかった。負ける子がいるから、勝った子をほめるなどいうのでは、勝った子のはげみにならないと反論されたら、返事ができなかつただろう。これは負ける子、勝つ子を認めた、個人能力主義の次元でものをいっていたからである。

和光の競技（演技といっている）は、全校二六〇人を、一年から六年まで、たて割のチームを四つ作り、それぞれに六年生がチーム・リーダーとなり、下級生を指導して練習や準備に当り、当日は二チームずつ、赤組と白組に分けて、それぞれのチームの得点を赤白ごとに合計して、勝敗をきめるのである。

そのため個人の得点はまったく個人のものではなく、チーム全体のものとして考えられる。簡単なことのようにだが、これによってエゴイズムが克服される効果はおどろくほどである。子どもたちは皆のために戦い、皆のために勝とうとする。能力の低い者も、できるだけのことをし、その総合が得点となるので、

個人で評価されるよりは気も楽だろうし、自分なりに一生けんめいやって、力を合わせたのだという喜びもあるだろう。

プログラムにはこう書いてある。

ひとり ひとりが全力を出しきろう。

その力を ひとつに結集しよう。

午前中は父母の出番が多く、私もつなひきにひっぱり出された。私が加わったのが原因かもしれないけれど、残念ながら負けてしまった。「おどり」が三つあったが、いずれも日本の民謡おどりで、「かんちよろりん」「江刺甚句」「春駒」、この春駒は一年から六年まで、先生も加わり、全員が三尺やしごきを美々しくたすきに掛けて、とてもきれいであった。

午前中の最後に低学年（1・2・3）の全員リレーがあり、これがよびものだということで、私も、体育館の横にテラスがあるので、応援の声がワアワアというさわぎ、私の隣にいた奥さんは、「うちの子三年なんです。」といいながら「アア、しっかりしっかり、アア転ばないで、アアそっちへ行っちゃ損！」などと絶え間なくさわぎ立てる。きいているうちに気がついたのは、総合得点なので、自分の子どもだけ応援すればいいということではないのである。赤なら赤全体を応援しなくてはならない。かくて始めからしまいで、叫び続けるということになるのだが、公立の学校でも、この総合得点だけなら、やっているところもありそうに思われる。ただ立て割り班をつくって、違った年令の子どもたちを組織し、その話し合いで運動会を運営

させるといふのは、たしかに小規模校の強みである。年上の子どもとの接触が少いのが、今の子どもたちの精神的成長をおくらせる一因になっているのだから……。

娘の話によると、三年から六年までの全学級が、（といつても五学級しかないが）運動会の準備としてまず、①準備 ②班長 ③得点掲示 の三係に、立候補することを求められる。学級としての立候補であるから、学級で話し合いをして、何に立候補するかをきめ、次に「全校総会」を開き、投票によって学級の仕事が決められる。もちろんそこで、話し合いや調整もあるのである。班長学級は今年が六年の一、二組になった。今年が六年生が二クラスあるので、こういうことになったが、例年ならば各学年一クラス（25人、40人）なので、おそらく六年と五年がなるのであろう。この学級から、たてわり班をまとめるチーム・リーダー四人を選挙で出すのである。（麻子はこのチーム・リーダーになってきわめて熱心であった）。さらに応援団長二人をえらぶ。これがなかなかおもしろいのだが、演技の中に応援合戦というのがあって、赤白双方の応援団が、それぞれ自分たちで工夫した応援の演技をきそう。応援団長は扇を持つたりドラムを打ったりして、一同を煽動するのである。

それぞれの種目に、誰をどのような順番で出すかは、得点に大きな影響があるので、それこそ戦術会議みたいなものを持って、議論をし、学級では足の早い子のとりあいまでであるという。それも何とか話し合いを重ねておさまるといふことだが、このようにできるだけ運営を生徒に委せ、しかもアナキーにならないように、組織の形や話し合いの技術を指導しているように

あった。麻子など、勉強は出来る方とはいえないので、公立にいたときは、いっこうクラス運営の責任感などありはしなかったが、この運動会でリーダーとなり、毎日おそくまで会議や練習に熱中した。日もおしつまってから、風邪を引いたので、万一を慮ばかって一日休ませたところ、先生に電話をかけて、リーダーの代行を誰それと指定し、下級生のどういう子が、どういふ問題でいふことをきかないから、注意してくれなどと、こまごま指示（先生に！）している。成長を目のあたりに見る思いであった。

さてとなりでさわぎ立てていた奥さんは、叫ぶだけでなく、私を小突いたりけったり、たたいたりして同感を求めるので、私は彼女のやることがおかしくて耐らず、涙を流しよだれを垂らして、笑いに笑わずにはいられなかった。彼女はそれを、リレーをみてコーンしているのだと感違いし、さらに私の肩をたたいたりした。

ようやく終わったところで彼女がいうには、
「やっぱりこはせまいわねえ。（しかし東京都内ではめずらしい土の運動場で、そんなにせまくもないのだが）去年は鶴川（和光高校・大学の新校舎）でやったけど、広くてよかったわ。でもあそこは運動場のまわりがタンボなんで、子どもが演技を見ないで虫をとりに行っちゃってね、いくらとめてもだめなのよ。それを丸木さんたら、おしまいの挨拶で、きょうはよかったね。運動会もおもしろかったし、虫も採れたし。なんていうんだもの。」

ある青春(22)

大阪市 津 堂 健 治

上野駅、五番線ホームの改札口から山佐大作の大柄な学生服が消える。義姉と学友を交互に見て角帽に手をふれ「じゃア征ってくる」と低く告げた。

昭和十九年十一月廿六日『上野発十六時五〇分長野行準急』は例によって詰めこめる制限一杯の人をのみ、懸命に彼の乗りこんだ車輛を確めようとしたが徒勞であつた。

ちやうど一年になる。上野と品川の駅は違うが同じ学徒兵として帰郷する吉江薫を見送つたが、あの時は歡呼の嵐と旗の波で学徒専用車だったから座席もあつた。が、山佐に座れる席は無からう。おそらく立ちん坊で仮に座席を見つけても人の良い彼は老人や病弱な旅客に譲っているだらう。

吉江は国旗を櫂の颯爽たる出陣ぶりだったが山佐は外見的にも単なる学生の独り旅にしかみえぬ。入場券の発売は禁止されていたから車窓の見送りは叶はなかつた。

一年の歳月が冷厳なハンディをつけたのである。

❖ ❖
「戻りましよう」

松山としが構内一杯の騒音の中で茫然としている健治をひき立て、すれあう群の中を出口に向かつたが曲り角で肩口が横を行く中年の警防員の胸に激しく當つた。

「おい！」男は強い語調で咎める。

「なに!?」ぶつきら棒な応えだ。互いの目が睨みあつたが男は険しい姿勢で立ち去つた。

非は明らかに健治にあり、詫びるべきだったのに――。

「貴方たら……」

としは呆れた様子である。

「僕は変ですわね」

「わかつてらつしやるの」

「判らない」「……!!」

外に出ると街の灯が、はやおとずれた夜のとはりにうるむ。

「寒くなつたわ」

彼女は黒っぽい肩掛けを頼まで包んで白い息を吐く、

「今夜は警報がなくて済みそうね」

黙々と歩く横で、とりとめもなく話しかける。

「大作さんの汽車、もう大宮あたりかしら」

大宮か、Aの郷里だが彼は先月応召した。逸川も相馬もやがて征つて了う。留年退学になつた江口に召集令状が来ているかも知れぬ……が、気にするのは止そう。彼等の明日がどうであれ自分とは無関係なのだ。

❖ ❖
バス、徒歩、そして僅かな区間開通している都電を乗りつぎ、

「しのや」の前に着いたが、閉店時刻で灯は消えていた。

「お疲れさま、今夜はぐつすりおやすみなさい」

人影は無い。としはショールをとり健治に会釈した。

「おやすみ、けど眠れそうにない」

「駄目よ、よくお休みにならないと」

温かいその声を聞くと悲しみがますのは何故だろう。

彼女を見送り、暗い夜道を逸川の許へ歩く、不発弾の処理は未だで、私鉄線も不通のまゝだ。ポケットに手を入れると小さな紙片にさわった。丁劇場の指定席券だったが掌で握りつぶす。夜空は星が無く冷めたいモノが耳たぶをかすめる。雪だ。風が出てきて瞬時に吹雪にかわる。前方から来た人影が急いで駆け抜けたが歩速を変えなかった。むしろ、ちらつく白さを目を細めてみつめていた。

山佐も車窓から降雪を眺めているだろう。暗い歩道のすぐ先の電柱に、無数の白い蛾が舞い狂うように、雪が降る。

『人間は独りばっただ。孤独に耐える power をつくるべきだ。』

それには自分が如何に愚かで弱い人間だろうと、ともかく、己れの power を信ずる他はない。』

青春、青春とは本来孤独なものなのか、それともこんな感傷に浸るのは生まれる世紀を誤った故だろうか。



山佐の入隊は十二月三日、体力のある彼だから『甲幹』は軽いだろうが、それまでの数カ月が問題だ。逸川政雄が『予備学生か特別幹候を何故受けないか』と不審がるのも実はこゝである。

兵役に服すのだから学業から離れるのは同じだが応召での入営は二等兵からの出発で、予備学生や特別幹候なら始めから下士官待遇だ。楽だという。語弊があるが中卒資格で与えられる『幹甲』は、二役をやり遂げねばならぬ。つまり一兵卒として

の訓練の他に幹甲志願の準備が要るから消耗度は激しい。

予備学生や特幹を受ける人間を軽蔑するのではないが、祖国の為に『からだを張る』という点では純粹だし、打算のない生き方だ。それは吉江薫の『特典』をフルに活用する考えと違うが健治も山佐の気持も愛国心を充分にもっているからで、戦争否定の酒巻修吉と同様だったと思うのだ。



学徒出陣から一年、陸・海軍予備学生、特別幹部候補生の試験が目睫に迫ったが、此の頃やっと健治は下宿へ戻れた。けれど不発弾は埋没されたまゝで電車は最徐行で通過する。一時は時限爆弾では？との噂もあったが、そうではないらしく車輛の通る度に厄介な物体は沈下してゆくようだ。

『物騒な下宿より、此処のほうが良いぞ』

逸川は言うが、いつまでも彼の世話になって居れない。それに彼も愈々志願する。

『俺達、学生は非常時局では一種の厄介者だ。非生産的人間の代表とみられている。だから、我々だってやれるという所を見せてやるのだ。』

処で、逸川政雄の予備学生受験が海軍であるのは頷ける。昨年の学徒出陣でも陸軍と海軍では同一行動をとっていない。健治達学生には中学以来、軍事教練（陸軍）の印象は甚だ悪い。外見的にもクリ／＼頭でカーキ色の軍服は全くイカさないのに海軍は長髪でスマートな紺の制服だし、海軍報道部長平出英夫大佐は、『学生諸君の知性を待望する』とよびかけ、在学中の教練成績を参考にしないと云ってくれる。

知性を尊重する海軍に最後のよりどころの様な救いがある。

が、海軍の受入れる学生数は陸軍に比して三割弱の比率で海軍を志望しても状況如何では陸軍にまわされると但し書がある。N 薬の配属将校も海軍志望の多いのに喚びている。

「お前達は陸軍を逃げる気か！」
だが学生のそれが彼に對する痛烈な抵抗でもあった。

軍関係受験日は工場の休電日でもあったので健治の熟睡が久しぶりに充たされた。

……………健治は若い男と対いあっている。

小造りなからだ、強度の眼鏡をかけた顔が話しかける。そのバク／＼とのび縮みする唇に見覚えがあり、いつの間にか煙草をくゆらせている。

「迷つてはあかん。自分の考えをとおすのだ。」

この頃の健治の望みは薬学部から医学部進入であつた。それは少年期の夢とは一八〇度の転換だが、とみに老衰した父を喜ばせる事柄ではある。

「けどなあ……………」

「その『けどなあ』が悪い癖だ。学生らしく勉めるのや。それとも軍人になつて了うかい」

「厭だよ」

「なら、そうするのだ。怖れず励むのだ」

「では、君はどうだった？ 何故、あんな死に方をした!？」

彼は応えず顔を俯せ、健治が尚、問い質そうとすると、酒巻修吉の姿は霧のように薄れていった……………。

❖
❖
数日が経ち工場へ通う学生の半数近くに減つたのは、軍関係へ在籍する者が出来たからだ。

健治のルームからは四人志願し、三人合格したが、間違いない筈の逸川が選ばれていない。

彼は発熱の爲、棄権したのだが皮肉にも発表の日には本復していたのだ。

空襲が珍らしくなくなった。あの日から幾度目かと指折り数えても、あの日の印象が薄らぐ執拗な繰返しで、もうどうともなれと、やけ気味になり、工場へ通う車窓の眺めが昨日と今日とでは信じられぬ変化があつても「おやおや」と少し目をこする位だ。驚きにも馴れ、感情が乾ききつて、「生」や「死」に就いてひどく鈍化している。今日を生きのびれば、「ああ、まだ死なずに居る」と、夜床に就くとき、そんな独言を吐くだけなのだ。

十二月十五日、此の日健治は、予備学生に合格した東京在籍の友人数名の入隊を見送っている。

◎T・K―身長は健治なみだが体重は47キロしかない。長男だが彼の下は女ばかり。成績は拔群の秀才タイプだが軍人としては首をかしげたくなる。

彼を送別する際、母親に挨拶したが眼はぬれていた。「幼い頃からひよわな子でしたので薬の学問をさせ健康に成人して欲しいと思つて居たのですが……………」言葉尻は細い。

「人生は夢があるからこそ生甲斐もある。二〇代はこうで、三〇代はあ、なる、四〇代はこんなふう……等と予定の刻まれた生涯など、砂を噛むみたいだが、現在ではもっとひどい。夢どころの騒ぎでない。『運』と云うものがあるが、日本人に生まれた『天運』は最低だった。学生のソレは全く無造作に兵隊に姿容させられるのだから、この国に生を享けた男児は明治維新後、日浅く確立した『勅令主義』の悲劇を背負わされているので、突発的に昭和十八年、学徒出陣が決まったのではない。もし、それに懷疑を覚えるとすれば、むしろ我々の不明だ」

彼はこの様に云っていた。理詰めの論法だが自身の気持は表明しない。戦争に積極的であるとか、無いとかを、批判すべき段階でないというのだろう。

◎K・J―都内に店舗のある薬局の息子で平均的な青年だ。水泳部員でスポーツマンらしい健康と適度に勉強する真面目さがある。外見的に深刻ぶるのを見た事がないが政治意識の稀薄さと思いたくない。

「俺は目標を何度変えたかな、中学時代、兄がいた頃は写真家になろうと思ったが、途中で建築技師にあこがれ、次は天文学が好きになった。卒業の折、商船学校を志望したけれど、兄の病死で家業をつぐ為、薬学に変更した。これで落着く筈だったのが軍人様だ。忙がしい人生だよ」

一米六八糎、六〇キロ、視力一・〇、まず将校の素質はある。

◎相馬竜士―K・Jより十キロ重い彼に就いては軍隊向きでないのはT・K以上だ。動作の鈍さ、高所恐怖症、ごていねいに泳ぎはカナヅチの此の男が海軍に採用されたのだから他人事な

がら気がもめる。実家は東北の寺院だが東京に籍があり、僧侶の叔父が後見だから本来は仏教関係校へ進むべきだったろう。坊さんの倅が薬の学校へ入り、海軍士官となる。彼の青春も奇妙である。

彼の見送りに菅瀬菊江は現われない。心なしか淋しげだったが歡送の群に^{こた}応えて敬礼した角帽が不自然な程横向きに歪んでいたので深刻さがふつとび、如何にも彼らしい情景だった。

※

※

翌日は同じ下宿屋に居たH・Aが特幹生として出立つるが彼は健治と同じ一浪者だ。

「君より先に征くとは考えなかった。君は九月生れで俺は十月だ。先に生まれた方が当然早く征くべきだろう。こんな事なら志願するのやなかった！」

邪気の無い言葉だ。彼の故郷は高岡で、かつて酒巻修吉との旅行中、^こ睡目^ををこすり「たかおか」の駅名は読んだが、その土地は知らぬ。旧加賀藩の静かな街で北国の情緒があるそうだ。

「今頃、君の故郷は雪できれいなやろ」

「そうだよ、高岡の街を詩^{うた}つたいのがある」

雪の降りつもった北国の駅
明けの四時 いてついた星

澄んだ夜空をのぞかせて

キンキンという寒さ

雪は降る

故郷の町に 友を眠らせ

「けど、俺の入隊はく、にやない、Y県になるらしい」

特別幹部候補生の教育はK市あたりで行われるとか、視力の良
い彼は空軍を志している。蟻のようにトボ／＼歩きまわる歩兵
なぞ真平、広い大空を飛び一発勝負だと叫ぶ。気持は判るのだ
が今の帝国陸空軍に彼を乗せる飛行機の補充があるだろうか。

(つづく)

編集後記

○顔のシワが気になり出すと、一年って早いですね。もう十一
月も半ば、そろ／＼こたつが恋しくなってきました。お元気で
すか。十月二十八日、前夜からの雨もあがり無事十周年記念集
会が開かれました。高木さんの彼主人が、三号まで続いたら御
褒美をあげるとおっしゃったそうですが、この様にして発売し
たわいふが、十年間一度の休刊もなく続いた事を、皆さんと共
に大いに喜び、自慢したいと思います。発刊当時の様子を高木
さんが書いて下さっています、当初からの方には、十年会員
の表彰状を差上げなければなりませんね。あちこちでミニコミ
の興亡が聞かれますが、更に内容の充実と発刊を重ねるよう、
お互いにわいふを盛立てて行きたいですね。

○今年のはじめ、これからのわいふ、どうしようとかちよつぱり
心細い話が出ていましたが、その後皆さんからのご投稿や協力
のお蔭で、順調に号を重ね、ここにテーマ「母親が外で働くこ
とについて」の特集を三冊続けて発行出来ました。編集員とし

て、又わいふ会員の一人としてとてもうれしい気持で一杯です。
(特集②の表紙絵は岡部節子さんが書いて下さいました)。「自
分を苦しい立場に追いやり、そこから何かをつかみたい」なん
てカッコイイ調子で編集部へ名を連ねてから、長い様で短い七
カ月が過ぎました。特集も終り、今ホツと一息ついていきます。
後藤さんの引立や回りの方の協力で、何とか残りの期間もがん
がり盛況のうちに、次の方へバトンタッチしたいと思っています。
す。ちよつと早いですが、どなたか後を引継いで来年編集の仕
事をして下さる方はありませんか。私も初めは「編集部」なん
て言葉にちよつと緊張しましたが、意気込み程の苦勞もせず、
却って今迄以上にわいふを身近なものに感じ、多くの楽しさを
味わいました。いい機会です。どうぞ一度、本を作り出すよろ
こびを味わって下さい。よろこびは多い程いいですね。ど
うぞお申下さい。お待ちしております。

○特集が続いたので「読書室」がお休みになっていましたが、
秋の夜長、たくさん本をお読みと思います。よかった本、おも
しろかった本を、皆さんへご紹介下さい。読書室の充実を願っ
ています。

○前に予告していましたインタビュの件、大阪東淀川の小山
節子さんを近々伺いする予定です。どうぞ次号をお楽しみに。
又、インタビュしてほしい方がありましたらお知らせ下さい。
○岡部さんがトイレットペーパー騒ぎについて書いておられま
すが、本当に腹が立ちますね。前の商社の買占めに続く今度の
生産者側の操作というマスコミを含め得体の知れない怪物に翻
弄されている様で、無力感と持っていき場のない腹立たしさを
感じます。喉もと過ぎればという事のない様、せめて主婦だけ

でも今度の事はしっかりとおぼえておき、今後の機会にこの怒りを示したいものです。

○「母親が外で働くことについて」私自身もちよつぱりこの立場にありますので、色々考えました。私の里は商売をしていましたので、回りにいつも人が居ましたが、母親はいわゆる母親專業ではありませんでした。近所も同じ様な家が多かつたせいか私はこの事を少しも不満に思つた事はなく、後にサラリーマンの友達の家へ遊びに行き、あまりにも自分の家とちがう様子に却つてとまどいを感じた覚えがあります。商売をしている家、農家、そして働き手の男性がいらない家等、ここでは母親が外で働くことがいいか悪いかを問うまでもなく、当然の事として受止められています。勿論、これらの家庭と普通のサラリーマン家庭では色々条件がちがいます。この問題を考える場合、自分の立場だけで善悪を論ずるのでなく、母親でも働きたい人、或いは働かなければならない人が現実にいる今、その人達が少しでも幸せに働ける様な社会であつてほしいと思います。そしてそんな社会になる様お互い何らかの手助けが出来れば……と思います。私は今、家庭と仕事の場と二つの生活を味わつています。何といつても家庭内のごちよつぱり外の仕事で感じるよろこびとは同一視出来ませんし、私は二つとも欲しいのです。今の生活は近所の人の助けや、夫や子供達の少しずつの辛抱や協力、私自身のちよつぱりの努力によって支えられています。この事を感謝しながら今日も自転車のペダルを一生懸命ふんでいたら、後のトラックから声がかかりました。「ネエちゃん、ガンバツテヤ!!」

○この欄を書きながらいつも気になっています。他の雑誌などの編集後記を見ると、簡潔でちよつぱりワサビがきいています。それに反し私のはというといつもだら／＼、原稿が少ない時はこれも取り得となりますが、どうもしまりません。でも編集のことといつても、編集といえる程の事をしています。何しろ書くという事で精一杯の私にとつて多くを望むのは所詮無理な話、それならと勝手にこの欄を私から皆さんへのお便りときめました。こんな気持で書いていますので、編集後記と書くのは少々気がひけますが、どうぞ、最後のページまで読んで下さいね。

○十一周年をめざし、更なる前進を!! どうぞ原稿をたくさんお送り下さい。お待ちしております。(鈴木記)

例 会 の 御 案 内

日時 十二月二日(日)午後一時より
場所 高木さん宅

テーマ 次から取上げるテーマの決定、その他

今月号は色々な都合が重なり発行が大変遅くなりました。ご心配頂いていたのではないでしょう。お詫び致します。記念集会報告にあります4つの提案を参考にテーマを決定する予定です。たくさんの方のご出席をお待ちしています。尚、遠方の方もご意見を当日までにお寄せ下さい。

毎月一回十日発行

原稿・誌代の送り先

〒665 宝塚市仁川宮西町1の72

「わいふ編集部」

発行人 高木由利子

発行所 わいふ発行所

振替口座番号 神戸19515

印刷所 百合写植印刷有限公司

誌代 一部 百円（送料25円）

原稿〆切 毎月二十五日（以降翌月まわし）